



三上社長にきいてみた。

シリーズ「まちづくり考」その8 ～ふるさと原理主義的歴史観を～

前号に引き続き「まちづくり考」待望の第8弾！！

このシリーズは、様々な観点から三上社長のまちづくりへの考えを聞いていくコーナーです。

ふるさと原理主義で歴史を語る

地域に根差し地域と共にまちづくりを進めるにあたって、地域に対する共通の「熱い思い」が大切になる。「地域の歴史」は多くの人にとって、郷土愛に繋がる好材料だ。そこで、地域の人々が共有できる歴史を「ふるさと原理主義」という考え方のもと、まちづくりの原動力につなげる術を紹介する。

ここで言う「ふるさと原理主義」とは、自分のふるさとは素晴らしい、という基本的な理念や原理原則を厳格に守ろうとする立場や主義。ふるさとファーストと表現しても良い。個性は究極の競争力であって、これを最大限に活用することでもある。

1. 歴史を解釈すること

「勝者の歴史」と言う言葉は、歴史は立場によって解釈が様々であることを意味する。過去の事実関係は動かしようがないが、その背景や動機などについては、実のところ、本当のことは分からない。解釈次第、ということだ。一方で時代考証とは、事実関係や道具や衣装、風俗や作法などが、その時代のものとして適当であるか否か。しかし、否定する史料が存在しない限りは、何がどうであっても間違いとは言いきれない（NHKエンタープライズの見解）。

それでは、私たちは歴史をどのように解釈すれば良いのか。

2. 浪漫主義的歴史観

浪漫主義とは、個性や自我の自由な表現を尊重し、知性よりも情緒を、理性よりも想像力を、形式よりも内容を重んじること。このような観点に立ち、「だったらいいな・・・いやいや！（嘘ではない範囲で）それでいいんだ！」と言った歴史観、それを私は「浪漫主義的歴史観」あるいは「原理主義的歴史浪漫」と呼んでいる。

いくつかの歴史的事象から、個人的な背景や動機、想いを想像、想定すること、解釈することは自由。そしてそれは、否定する材料がなければ、決して間違いとは言えない。むしろ、浪漫を持って肯定的に解釈しよう。独自の解釈（浪漫主義的歴史観＝原理主義的歴史浪漫）で、ふるさとに生まれ育ったことの誇りを伝えよう、というものだ。

3. ふるさと原理主義に立った浪漫主義的歴史本の数々

日本の幕末維新史は、司馬史観に覆い尽くされている。これは正に勝者である薩長土肥の歴史観だ。大阪出身の司馬遼太郎なりのふるさと原理主義に基づいた一つの歴史浪漫だ。しかし今世紀に入ってから、幕末維新史について異なる解釈、異なる立ち位置をとる本が数多く出版されている。

星亮一（元福島民報、福島中央テレビ局長）『偽りの明治維新』（2008）。「天皇を利用し戦争を仕掛けた薩長が官軍で、尽忠報国の会津が賊軍となった会津戊辰戦争の歴史を紐解く」。福島のマスコミ関係者であるだけに、会津鼯鼠で薩長は鬼。

榊原英資（元大蔵官僚）『逆説 明治維新』（2013）。「敗者である幕府側からの視点にたって明治維新の実像を客観的に解き明かす」。東京出身の元官僚であるので、幕府側かつ官僚の立場からの思い入れの強い内容。今の日本を作ったのは、薩長ではなく幕府官僚である、と。薩長のご都合主義、節操のなさをはっきりと指摘している。

半藤一利（東京出身で親の実家が長岡）『もう一つの「幕末史」』（2015）。「薩長による尊皇攘夷は、幕府を倒す口実だった。独自の歴史観を織り交ぜながら、その実像に迫る」。出身地や疎開先の実家の関係から、薩長嫌い。しかも江戸っ子らしく勝海舟大好き。維新のお手柄は海舟が独り占め。

原田伊織（京都生まれの彦根育ち）『明治維新という過ち』（2015）。「日本を滅ぼした吉田松陰と長州テロリスト。明治維新という無条件の正義が崩壊しない限り、この社会に真っ当な倫理と論理を持つ時代が再び訪れることはない」。出身地から長州嫌い、育ちから水戸嫌い。なんと「テロを正当化した水戸学の狂気」として一章を割いている。

それぞれが自身のふるさとに思いを馳せ、ふるさと原理主義に立った独自の解釈で歴史浪漫を展開。良し悪しの問題ではなく、解釈論である。全く自由な世界で、どれも間違いではない。

4. 茨城でもふるさと原理主義的歴史観を

私たちのふるさと茨城県のイメージは、悪い。それは当然のことだ。茨城人はふるさとを自慢しない。悪いことばかり言う。自分たちがふるさとを褒めないで、誰が褒めるのか。ふるさと原理主義に立って、もっと自画自賛、勝手に褒めまくって自慢するべきである。もっと自己満足的に地域を満喫することが大切だ。郷土教育も、もっと郷土本位に、ふるさと原理主義で進めて欲しい。その積み重ねによって、まちづくりの原動力が地域の中で育まれてくるのであろう。